

平成 19 年 10 月の解説（府県天気予報）

【10月の天候状況】

上旬は本州南岸に前線が停滞し、東日本、西日本では太平洋側を中心に曇りや雨の日が多くなりました。中旬はサハリン付近を通過した低気圧や上空の冷たい空気の影響で北日本や日本海側の地方では曇りや雨の日が多く、西日本では高気圧に覆われて九州を中心に晴れの日が続きました。下旬の前半は高気圧に覆われて西日本を中心に晴れの日が多くなりましたが、後半には前線と台風第 20 号の影響で全国的に雨が降りました。

月を通しての日照時間は、北日本、西日本日本海側の地方で多く、東日本太平洋側の地方で少なく、そのほかの地方では平年並でした。降水量は北日本から東日本にかけての日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美地方で少なく、そのほかの地方では平年並でした。気温はほぼ全国的に平年より高く、特に西日本では九州を中心に多くの観測地点で平年より 2℃以上高くなりました。

【10月の検証結果】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が 82% で例年（注）より 1 ポイント低く、明後日予報が 80% で例年と同じでした。地方毎の適中率では、明日予報は近畿地方で 10 ポイント、中国地方で 5 ポイントそれぞれ例年より低く、九州北部で例年より 5 ポイント高くなりました。明後日予報は関東甲信地方では例年より 10 ポイント低く、近畿地方で 5 ポイント、九州北部地方で 10 ポイント例年より高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は例年に比べて九州北部地方で 0.3℃小さく、全国平均は 0.1℃小さい 1.6℃でした。また、最低気温の予報誤差は、九州南部地方で例年より 0.3℃小さく、全国平均は例年より 0.1℃小さい 1.4℃でした。

（注）例年値は気象庁 H P（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【10月の天気予報から】

発達した低気圧が 10 月 8 日にサハリン付近を通過し、この低気圧からのびる前線が日本付近を南下したため、日本の広い範囲で雨が降りました。その後、前線が本州の南岸沿いに停滞したために（図 1）、9 日の朝から昼にかけて主に東日本、西日本の所々で雨が降りました（図 3）。

8日の夕方に発表した東京地方の明日(9日)の天気予報は「くもり時々晴れ」でした。これは8日に南下した前線が9日の朝には八丈島の南まで下がり、関東地方は大陸の高気圧にゆるやかに覆われると予想し(図2)、東京地方の天気は回復して雲は広がりやすいものの雨は降らないと判断したためです。

9日9時の実況(図1)を予想(図2)と比べると、オホーツク海の低気圧と日本の東海上にのびる寒冷前線はほぼ予想どおりとなっています。ところが東シナ海中部の台風第15号から変った低気圧は、予想では台風のまま東シナ海の西端にあり、また、本州の南岸にのびる停滞前線も予想できていません。

停滞前線が発生したことで、東京地方の天気は予想より回復が遅れ9日の昼前から昼過ぎにかけて広い範囲で雨が降り、東京(大手町)の9日の日中の天気は雨後曇りとなりました。

このオホーツク海の低気圧のような大きな規模の低気圧の動向はある程度正確に予想できることが多いのですが、台風や停滞前線上の低気圧などの予想は本事例のように難しい場合もあります。天気は台風や停滞前線などの現象に大きく左右されますので、これらの動向をより正確に予想することが天気予報の精度を向上する上で重要な課題の1つとなっています。

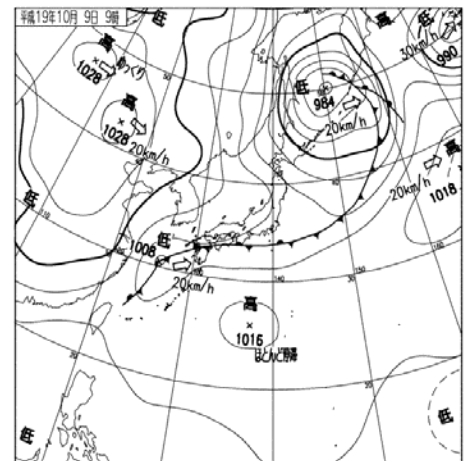


図1 実況地上天気図(10月9日9時)

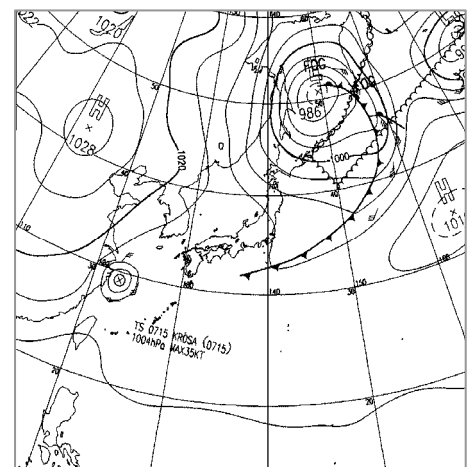


図2 前日(8日)の予報で使した9日9時の予想地上天気図

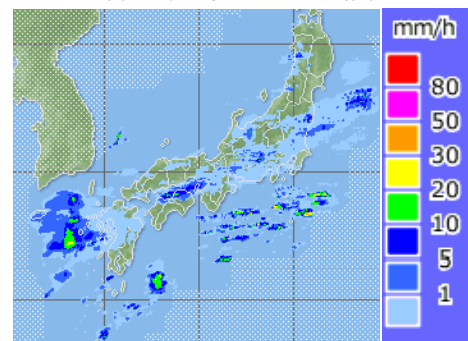


図3 9日9時の解析雨量(前1時間)

【12月の天気予報の利用にあたって】

12月は本格的な雪の季節の始まりです。北日本では雨よりも雪の降る日が次第に多くなり、山沿いや日本海側を中心に時には大雪となることもあります。

特に低気圧が発達しながら日本付近を通過した後、強い冬型の気圧配置となるときには、北日本や日本海側を中心に暴風や高波、大雪、ふぶき、突風などにより、建物などの損傷、停電などの被害や列車の運休、航空便や船便の欠航などの交通障害が発生するおそれもあります。各地の气象台で発表する最新の気象情報を活用して事前に備えるようにして下さい。